

認定看護師（以下、認定看護師）と交互に評価を行っている。

IV. 結果

この病棟認定コーチ制度を受講した3名の看護師は、希望してこの制度を受講したことからもわかるように、以前からこの分野に興味を持っていた。現在では3-4病棟での専門的な嚥下機能評価はこの3名が行っており、評価、訓練の立案、食物形態の選択などは問題なく行うことができている。しかし、受講者からは講義内容が多く3回では難しい、実践に不安がある、といった意見が聞かれた。周囲の病棟スタッフからは高評価が得られており、認定看護師が不在の際には次の出勤まで保留になっていたことが認定コーチの誕生でタイムリーに相談できるといった意見が多かった。しかし、勤務時間外に評価を行っている姿を見て「大変そう」という意見もあった。

院内で摂食機能療法加算が導入されて一年が経過した。病院スタッフにも徐々に周知され、算定患者数も増加している。脳神経病棟である3-4病棟はもともと算定患者が多いことは当然であるが、平成25年10月の時点で3-4病棟の算定件数は院内全体の29.8%であった。しかし、認定コーチを導入し活動し始めた平成25年12月には院内の53.8%を占めるようになっている。

V. おわりに

現在は3名の看護師が認定コーチとして患者の嚥下機能評価と摂食機能訓練の選択を開始している。先にも述べたように、認定看護師が一人で嚥下機能評価を行っていた時に比べ3-4病棟での摂食機能療法加算の算定患者は明らかに増えている。また、認定看護師のみで評価を行っていた時には依頼を受けた患者の評価に加えて自ら嚥下障害が疑われる患者を抽出して関わっていくには限界があった。現在は認定コーチが増えたことにより看護師サイドで積極的に介入ができるようになってきている。病棟スタッフも認定看護師だけでなく、認定コーチにも声をかけ相談をすることで摂食・嚥下障害に関する知識が増えていくことが考えられる。その結果、病棟内で経口摂取を開始できる患者も増えてきている。病棟認定コーチの3名は自分の担当している患者の訓練の成果や食物形態が上り元の生活に近づいていく姿をみることができ、周囲の病棟スタッフからも認定コーチとして認知され自信にもつながっていると思われる。そして今回学んだ知識を持って患者に関わることでこの分野を得意分野として病棟の看護の質の向上につながっていると考える。今後の課題としてはこの3名が積極的に入職者や勤務異動者の指導や、患者・家族指導に介入できるようにしていくことが必要となる。

3号館での防災の勉強会を行って

3-7病棟 高橋 涼子 牧野 仁美
五十島 暁子 野田美由紀

I. はじめに

東日本大震災以降、防災から減災の意識に世の中がかわりつつある。私達は災害が発生した場合に、自分自身の身を守りつつ、入院患者の安全確保の為、災害状況に応じた判断と行動が必要となり、その為には平時からの研修、訓練が必要である。

当病棟は昨年11月に3号館へ移転し、災害発生

時の初動体制や施設・設備の理解に曖昧な部分があり、不安を感じていた。

そこで、災害時初動体制を知ること、病棟内の防災設備の確認、体験を目的に勉強会を行った。今回スタッフへのアンケート調査を行い、その評価と今後の課題について報告する。

II. 目的

防災の勉強会を行った結果、その効果と今後の課題を知り、今後の勉強会の方向性を見出す。

III. 方法

1. 対象

3-7病棟に勤務する看護師，看護助手 24名

2. データの収集方法

1) 勉強会の内容は、

- ①初動チェックリストの使用法、役割分担について説明する
- ②施設、設備（消火器、消火栓、排煙口）の説明後、実際に病棟内をまわり、場所と使用方法を確認する
- ③非常口を確認し、避難経路について説明する
- ④防災セットや担架について説明する
- ⑤トリアージタグの説明

2) 勉強会に参加した結果、感想・意見・要望について自由記載する独自の質問紙を作成した。

3. 倫理的配慮

アンケートの回答は無記名とし、今後の業務自身の評価に直接影響しないことを説明し同意を得た。

IV. 結果

アンケート結果から、勉強会を行ったことで「普段自分が災害の事を何も考えず仕事をしていると気づき知らないことが多かった」「災害時は冷静に行動できるようにしたい」などの意見があり、改めて災害に対するスタッフへの意識が高まったと考えられる。また、災害発生時の初期対応について「初動チェックリストを再認識することができ使用方法が理解できた」「初動行動時の役割分担を知り、どう行動すればよいかイメージできた」「施設、設備の確認を実際に見てまわることで不安が解消された」「非常階段の位置や防火扉がないことを知り、避難経路について確認することができた」「救助袋や担架の使用法をみるこ

とでイメージができた」との意見から、最低限知っておかなければいけない施設・設備の位置や避難経路の確認、初動チェック、担架の使い方など実際に見ながら行うことで再確認することができ、スタッフの不安は軽減し、使用方法など周知できたと考えられる。

今後の勉強会については、「避難経路が階段であり、担送患者の搬送、避難が不安」「避難経路が階段か別館に行く方法しかなく、マンパワーが必要だと感じた。少ない人数での対応に不安を感じる」との感想から訓練の必要性が分かった。

V. 考察

減災とは災害時に発生する被害を最小化する為の取り組みのことをいう。奥寺ら¹⁾は災害への心構えで最も必要なことは「災害は起こるものである」という認識にたつことである。そのうえで、「災害について知る」「災害についての備え」を進めることが大切である。そうすることで災害発生時には速やかに対処でき、被害を最小限に食い止める「減災」を可能にすると述べている。今回勉強会を行ったことで、その認識がでてきたことは良かった。しかし、まだ「災害についての備え」という部分では課題があり、アンケート結果からも「避難経路が階段であり、担送患者の搬送、避難が不安」「避難経路が階段か別館に行く方法しかなく、マンパワーが必要だと感じた。少ない人数での対応に不安を感じる」との感想から訓練の必要性があると考えられる。災害時は日常行っている業務以上のことはできない為、大橋ら²⁾は災害訓練は、経験不足を補うために、災害の疑似体験の1つとしてさまざまな教訓を引き出すと述べている。また、奥寺ら¹⁾はマニュアルの内容を理解し、知識として身につけたうえで、訓練を体験しておくことが「災害の備え」として何より大切であると述べている。経験の度合いが多いほど災害対応能力が高くなると言われていることから、疑似体験を積み重ね、災害対応能力が高められるように、机上やシュミレーションなど定期的に訓練を行うことで、実際の災害時に冷静に行動できるような

スキルを身につけられる勉強会を企画する必要性を感じた。

VI. まとめ

今回勉強会を行い、その後のアンケート結果から、スタッフへ病棟内の施設・設備の位置や避難経路確認、初動チェックの使い方について周知できたことは良かった。今後は、スタッフからの意見や、災害拠点病院となった場合も想定した災害発生時の初期対応（アクションカードの使用法など）、入院患者の安全確保、傷病者の受け入れ対応などについてロールプレイングを用いた勉強会の企画と、病棟の災害発生時の行動マニュアルが作成できるよう活動していきたい。

また、今回は病棟の移転に伴い、防災に対する

不安があったことから勉強会を企画することとなった。しかし、山崎ら³⁾は訓練をしないのが一番の災害であり、「訓練は実践のごとく、実践は訓練のごとく」が基本であると述べているように、定期的に継続した訓練ができるよう取り組んでいきたいと思う。

引用・参考文献

- 1) 奥寺 敬, 山崎達枝:災害時のヘルスプロモーション2 減災に向けた施設内教育研修・訓練プログラム, 荘道社, P40, 2010
- 2) 大橋教良:災害への準備, 太田宗夫:エマージェンシーケア, 新春増刊号, P69, 2007
- 3) 山崎達枝:3.11東日本大震災 看護管理者の判断と行動, 日総研, P11, 2011

マタニティヨーガ教室活動報告

6-1病棟	正木 育未	渡邊 幸子
	鈴木 知代	八木 貴子
	市川恵美子	西岡 恵美
	松井 香織	佐藤 未来
	梅原実希子	石川 睦子

I. はじめに

近年、出産年齢の高齢化によりハイリスク分娩が増加傾向にある。それに伴い現代医療の恩恵を受けると共に、分娩時異常に移行せず安全に出産しその後の育児につなげていくために、妊娠期から妊婦自身が自分と胎児に意識を向け、心身ともに健康に過ごす事が重要となる。現代では生活様式の変化により運動不足が指摘されている。マタニティヨーガは、運動習慣のない妊婦でも安全に継続してできる運動として普及している。また、自分の内面や心の奥深い部分に触れ胎児と向き合う貴重な時間を作り出し、心身を安定させお産への前向きな気持ちを持つことができるなど、妊婦の体と心の調和を図るのに効果的な運動の一つである。つまり、マタニティヨーガを継続することで運動習慣を身に付けることができるだけでな

く、満足のいく妊娠・出産・育児につなげていくことができ、自己管理意識を高める効果がある。そこでマタニティヨーガ導入のため平成24年5月よりプロジェクトを立ち上げ活動を開始した。まず近隣施設の情報収集や教室の運営企画、広報活動などを行った。その後、平成25年7月よりマタニティヨーガ教室を開催、その間新たにマタニティヨーガに興味を持つスタッフが研修を受け指導資格取得者は8名となった。また、予約を希望する妊婦の増加にともない実施回数や予約人数を増設した。現在は参加した妊婦やスタッフの意見を参考に、教室運営の検討を重ねている。これまでの経過をまとめここに報告する。

用語の定義：マタニティヨーガとは、妊娠中の不快な症状を改善し安産に必要な機能を高める。呼吸法に合わせて全身の筋肉の緊張と弛緩を繰り返